

スタートカリキュラムのあり方についての考察 —幼児期の育ちと児童期の学びをつなぐカリキュラムの作成に向けて—

教育実践力高度化コース

(17AD001)

石田 典子

【指導教員】 宇佐見 香代 首藤 敏元 山口 美保

【キーワード】 スタートカリキュラム 保幼小連携 円滑な接続

I. はじめに

小学校に入学した直後の時期において、児童が不適応を起こしたり学級崩壊のように授業が成立しなかったりする状況を、新保（2001）は「小1プロブレム」として問題を提起した。小1プロブレムを引き起こす要因は様々に考えられており、どれか一つの要因に焦点化できるものではなく複合化した問題である。その中でも三浦（2017）は保育所・幼稚園等から小学校への移行期において、それまで取り組んできた「教育・保育の内容・方法等『学びのスタイル』の違い」を、また片平・野田（2016）は「入門期に仲間との関係を築けないこと」や、児童が「根本的な段差に戸惑うこと」と、教師が「子どもの戸惑いを見取り、その不安に寄り添った指導ができないこと」が大きな要因であると指摘している。

それらの問題を解決しスムーズな適応への改善に向けて、生活科の導入やスタートカリキュラムが提起された。平成20年『小学校学習指導要領解説生活編』で、「スタートカリキュラム」が明記され、入学当初の生活科を中心とした合科的な指導によって、幼児教育から小学校教育への円滑な接続をもたらすことが期待された。平成29年『小学校学習指導要領』の総則に、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続についての項目が新設された。「合科的・関連的な指導」や「弾力的な時間割の設定」等をキーワードに、スタートカリキュラムを実施することで、生活科を中心として全ての教科等の間の関連を積極的に図りつつ、幼児教育との円滑な接続を図ることが求められることになった。

入学当初の児童への指導内容や指導方法の工夫は、スタートカリキュラムとして編成される以前から、各学校、各担任によって計画され実施されてきた。現在、スタートカリキュラムは、平成20年『小学校学習指導要領』に基づき、各教育委員会や各学校が工夫しながら開発や実践がなされている。一方で、「子ども同士の交流や教師間の連携は活発になってきても、授業の中で、あるいは単元としてのカリキュラムでつなげる接続」（加納2017）についての課題や、スタートカリキュラムは「幼児教育での学びを円滑に接続し、安心感をもって小学校生活を始めるという側面や、教科教育への円滑な接続という側面」を期待されながらも、「学校に適応するため

の側面が強く出てしまい、適応指導的になってしまっている」（片平・野田2016）という課題が指摘されている。

II. 研究の目的

本研究の目的は、スタートカリキュラムの教育内容や実施状況等の分析を通じて、その課題を明らかにし、スタートカリキュラムに必要な教育内容や教育方法を検討してカリキュラム開発を行うことにある。保幼小連携や児童がより安心して学校生活を始められるようなカリキュラムをどう実現していくかを明らかにする。

III. 研究の方法

まず、平成29年度にさいたま市立小学校において計画・実施されたスタートカリキュラムの設定日数、実施時期、実施内容について調査・分析を行った。（有効回答数103校中101校）。

実施内容を、以下の8つの観点から分類した。

観点	内容
①	遊びを中心に幼児期の育ちを発展させる活動
②	交流等を通して人間関係を構築し不安を解消する活動
③	小学校生活に適応するための指導
④	教科学習への土台づくりとなる指導
⑤	生活科の活動
⑥	道徳
⑦	学校行事
⑧	その他（休憩やトイレ、写真撮影等）

スタートカリキュラムの特色の一つである「時間割の弾力的な運用」により、45分間の中に複数の内容が含まれることがあるため、15分～20分を1モジュールとしてカウントした。また、1モジュールの中に複数の内容が含まれる場合は、それぞれの内容を各項目にカウントすることとした。

次に、この分析を基に、スタートカリキュラムの改善案を作成し、筆者の勤務校で実施、分析・検証を行った。筆者が作成したカリキュラムを実施するのは、教員経験10年（本校勤務2年目）の1学年担任である。筆者はこの同僚の実施するスタートカリキュラムの実施に際してきめ細かく関わり、協議・相談を重ねた。スタートカリキュラムの実施の過程で、観察者による児童の行動観察、ビデオによる録画記録、担任への聞き取りを中心に

して詳細に記録をとり、後にその記録を分析し検証を行った。

IV. 研究の内容

1. スタートカリキュラムの現状と課題

(1) スタートカリキュラムの設定日数と期間

設定日数は、入学式を含め6～10日間設定している学校が最も多く、2週間程度の期間設定が多かった。1年生での給食が始まる入学後7、8日目に合わせて、それまで午前中のみであった授業が5時間授業となり、授業内容も通常の時間割に沿って行われていた。

実施時期については、4月初旬の入学式から開始し4月内で終了する設定である学校がほとんどであった。

しかし、教育内容の大きな変化を乗り越えることの困難さや、5月の連休明けに「登校しぶり」が増加する傾向があることから、もう少し長期の計画が必要であると考えられる。

(2) スタートカリキュラムの実施内容

入学式翌日で指導時間が最も多いのは、③小学校生活への適応するための指導であった(表1、図1)。内容を詳しく見ると、トイレや水飲み場、下駄箱等毎日使う場所の案内、ランドセル、連絡帳、筆箱等毎日使う道具類の扱い方、下校指導等であった。3日目以降は、下校指導が引き続き行われ、体育着への着替えや安全指導等が行われるが、生活適応のための指導は徐々に減少していた。7日目にモジュール数が増加するのは、7、8日目の前後に給食が始まるため、給食に関する指導がしっかりと時間をかけて行われるためである。

実施内容の割合を見てみると、小学校生活に適応するための指導が初日には多く、その後次第に減少し、代わって教科学習への土台づくりとなる指導が日を追うごとに多くの割合を占めていた(図1)。生活科や道徳の時間はさほど増減がなかった。学校行事は、身体測定、1年生を迎える会等であり、学校によって実施日にはばらつきがあった。①遊びを中心とした活動は、教科指導の時間内で行われているため、教科指導の時間の増加と関連して増えていくが、一定以上は増えず、スタートカリキュラムの実施が終わるとほとんどなくなった。

保幼小の学びをつなぐ場の中心となるであろう、遊びを中心とした幼児期の育ちを発展させる活動を効果的に設定するためには、どのような仕組みや手立てが必要であるか検討する必要がある。

表1 スタートカリキュラムの実施内容

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	総モジュール数
2日目	21	8	509	139	9	2	43	14	720
3日目	45	47	387	262	26	1	30	15	744
4日目	92	29	244	340	59	1	86	23	771
5日目	111	16	186	435	45	3	74	33	793
6日目	102	19	197	426	54	13	59	42	802
7日目	50	16	323	365	40	10	40	10	790
8日目	56	15	245	543	59	7	49	9	916

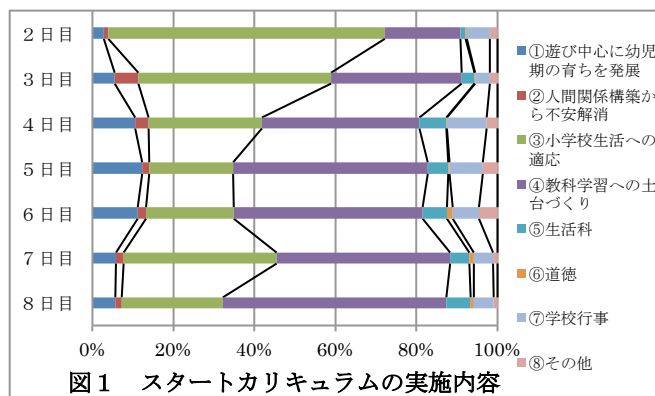


図1 スタートカリキュラムの実施内容

(3) 特色のあるスタートカリキュラムの事例から

(ア) 幼児教育で慣れ親しんだ活動を意識して組み入れている事例(さいたま市立C小学校他)

スタートカリキュラムで行われる学習活動は、幼児教育との結びつきが深いものが多く含まれるが、本事例では、「幼稚園・保育所等で親しんできた、遊びの要素の高いもの」について○印が付けられており、指導者が幼児教育とのつながりを意識しやすい工夫がされていた。

(イ) 円滑な適応への配慮として遊び中心の時間を帯で設定している事例(さいたま市立D小学校)

本事例では、新しい学習環境への円滑な適応への配慮として、毎日1時間目に独自の活動時間を設定している「ぼかぼかタイム」が見られた。「ぼかぼかタイム」では、歌、ゲーム、手遊び、読み聞かせ等、幼児教育で慣れ親しんできた活動を行うことで、保育園や幼稚園との円滑な接続が期待されている。

(ウ) 遊び→体験活動→教科学習の流れを意識した週案を設定している事例(横浜市立A小学校)

本事例では、表2のように、朝の2時間を「なかよしタイム(遊びを中心に据えた活動時間で前半は教室、後半は校庭での遊び)」とし、その後の1時間を「わくわくタイム(学校を探検したり見つけたことを共有したりする生活科の時間)」、1時間あるいは2時間を「ぐんぐんタイム(遊びの活動からの連続性を意識した教科の指導)」として大まかな流れが固定した時間設定がされていた。

表2 遊びの芽生えから自覚的な学びへの流れを意識した週案

時		2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目
1		●	●	●	●	●	●	●
2		●	●	●	●	●	●	●
3	入学式	□	□	□	□	□	□	□
4	学級活動	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
5						▲	▲	▲

●なかよしタイム、□わくわくタイム、▲ぐんぐんタイム

(エ) 生活年齢によるクラス分けと学年合同での指導でじっくり児童の様子を見取るプランを設定している事例(上越市立B小学校)

本事例は、出身保育園や幼稚園での経験の違い、生活習慣等に関する個人差に配慮し、児童の不安を取り除くと同時に児童理解を深めることに重点を置いたプラン

である。主な特徴となるものを3つ挙げると、第1に4月は生活年齢によるクラス分けで、担任は担当を日替わりで交代しながら1年生全体を支援し、5月の連休明けに正式なクラス分けを行っていること。第2に通常の教室の他に机のない広い学習スペースを用意し、幼稚園や保育園のような環境で過ごす時間を確保していること。第3に1日の始まりや終わり（朝の会や帰りの会）は、広いスペースを使い学年でリズム遊び等の活動に取り組むことによって、緊張をほぐし、友達つくりを促進させていることであった。

（4）スタートカリキュラムの課題

幼児教育と小学校教育との間には、環境、指導内容や方法など、様々な段差が存在する。保幼小の円滑な接続のためには、幼児期に育ってきた姿を十分に見取った上でカリキュラムを構築する必要がある。

小学校の入学当初、児童が初めての小学校生活や教科等の学習へ円滑に移行できるよう、指導時間、指導内容について工夫し、特に新しい生活場所や生活スタイルに適應できるよう丁寧に指導する必要がある。そのために、教科学習への移行がスムーズに行われるようカリキュラムの中に幼児期の遊びや活動を取り入れ、幼児期の育ちから児童期の学びへと円滑に接続するための活動の場づくりが必要である。1時間の授業の中に遊びを取り入れた活動を工夫して取り入れることだけでなく、1日の流れの中で、遊びや体験的な活動と教科学習とのつながりや関係性を配慮したカリキュラムを作成する必要がある。

また、保幼小連携の視点から幼児期の育ちを小学校でどのように発揮させ、どのように見取り、どのように発展させていくかが大切である。そしてそれを生かすことのできるカリキュラムをどう作成していくかが、これからのスタートカリキュラムの編成には求められる。

本研究では、幼児期における遊びを中心とした総合的な学びをスタートカリキュラムにおいて積極的に取り入れ、学びの連続性をもたせる場の設定について工夫したカリキュラムの作成と、実施を行った。

2. スタートカリキュラムの作成

以上の課題を踏まえて、本研究におけるカリキュラム作成では、以下の6つの工夫・改善を行った。

（1）安定した時間設定

小学校の学校生活は忙しい。朝から15分刻みで活動が詰め込まれている。園でのゆったりとした時間の中で過ごしてきた子ども（園児・児童）達にとって、活動内容のめまぐるしい変化に対応することは大変なことである。そこで、入学当初は、できるだけ登校後の活動内容を一定にし、安定した活動時間が毎日続くように設定した。登校後、荷物を片付けてから、プレイルームで自由に遊ぶ「ゆったりタイム」、みんなで遊ぶ「なかよしタイム」、絵本の「読み聞かせ」で気持ちを落ち着かせてから「健康観察」、その後「生活科（学校探検）」「教

科学習」といった流れを、行事で変更が必要な時以外は継続できるように設定した。

（2）コミュニケーションを活性化させる工夫（「なかよしタイム」の設定）

幼児期には様々な手遊びや歌、コミュニケーションをはぐくむ遊びを経験している。通った園は違っても同じような経験を積んできている子ども達は、慣れ親しんだ遊びを通して、初めて出会う場所や友達の中でも自分の力を発揮できると考える。

また、初めて出会う小学校の教員とも「なかよしタイム」の中で出会うように設定することで、親しみやすくすると同時に、新しく出会う人やその人がいる場所への興味や関心をもちやすくできる。

（3）幼児期の育ちを發揮できる場（プレイルーム）

小学校の教室は、園と全く違った環境であり、雰囲気異なる。今まで遊びを通して發揮してきた力を十分に發揮させるには、この環境の違いは大きな妨げになる。そこで、幼児教育で準備されていた教室に近い環境を用意し、自由に活動できる空間を保障する。

（4）自ら考えて活動する場として捉え直す

活動の場ややり方は違っても幼児教育でも様々な経験をしてくれている子ども達である。掃除や給食など、教員が初歩から教え込まなくても、これまでの経験を基に自分でやり方を考えることができることもたくさんある。上級生の生活を観察する時間や場を設定することで、教えられるのではなく、自ら考えて行動する場として、学校生活を捉え直した。

（5）育ちの見取り

幼児期にどのような育ちをしてきたのかその実態をつかむことが大切だが、小学校の評価の方法だけで子どもの育ちを評価することは難しい。幼児教育で子どもが力を發揮してきた遊びの中にこそ、子どもの本当の育ちの姿が現れる。入学当初の子どもに自由に遊びや表現ができる機会を与え、教師がそこから適切に子どもの育ちを見取ることが必要である。

（6）学校での生活の場の拡大

初めての場所、知らない人、新しい環境に子ども達は興味津々である。「学校にはどんな部屋があるのだろう。見てみたい」「学校にはどんな人がいるのだろう。話してみたい」といった子ども達の興味や関心を生かしながら学校探検（生活科）を設定することで、自分たちが生活する居場所として、教室だけでなく学校全体に活動の場を広げたい。好奇心旺盛な時期に、この活動を繰り返し行うこと、人と人をつないでいくことを通して、生活の場が徐々に広がっていくことが大切である。この過程で、学校という新しい環境に馴染みにくい子どもにも配慮ができると考える。

3. スタートカリキュラムの実施

（1）児童A（抽出児）の行動観察

第三者の立場から教室の様子を記録するため依頼した

観察者の記録と、ビデオ記録から児童の行動や発言を抽出した。

児童Aは、学校に近い保育園出身で、兄2人が同小学校に通っている。指示や説明はしっかり理解でき、自分で行動できる。担任や周りの児童の様子をよく見ているが、自分から話しかけたり、大きな声で自分をアピールしたりすることはあまり見られない。

〔平成30年4月13日（金）〕

登校後、荷物とランドセルを決められたやり方で自分で片付けた後、静かに自分の席で座って待っていた。周りの友達の動きは見ているが、黙って様子をうかがっていた。担任の「トイレに行きたい人は行ってらっしゃい」の指示で静かに席を立ち、1人でトイレに行った。戻ると自席に座って待っていた。

1年生を迎える会でもらってきたプレゼントを隣や前後の児童と見せ合った。きょろきょろと周りを気にしてはいたが、自分からは話す様子はなかった。話しかけられたら2、3言返事をする程度であった。

教科書を出す、筆箱をしまう、よい姿勢で話を聞く等の担任の指示をよく聞いて、行動した。外での朝顔の種まきや遊具遊びで「ここにダンゴムシがいた」「見て、穴掘った」「全部一気に埋めちゃおう」とつぶやきながら作業した。鉄棒遊びでは、Bと走り回ったり、「それダメだよ。Cくん、どいて」「先生、私が最初にいたのにCくんが割り込んできた」と、友達に話したり、先生に話したりして活動した。

〔平成30年4月17日（火）〕

登校後、数分で支度を済ませ、「ゆったりタイム」のために生活科室へ移動した。ブロックを出したDとEに混じって遊び始めた。「これは自分が使っていたやつ」「貸して」「見て」と、話しかけながら遊んだ。後から来た児童は遊びの様子をぐるりと見て回って同じテーブルに加わったり、別の遊び道具を出したりした。自分で空いている椅子を見つけたり、遊べそうな所を選んだりして混乱は見られなかった。ブロックのテーブルは徐々に人数が増え、総勢8名になった。Aは後から隣の椅子に座ったFと活発に会話しながらブロックを組み立てた。担任の「お片付けしてね」のかけ声に素早く反応して教室の自席に戻った。

教室では、先生紹介や学校探検の振り返りで、友達の発表などを静かに聞いた。休み時間は隣の席のGと時々話した。国語で教科書の挿絵を見て鳥を見付け、挙手して発表した。

〔平成30年4月24日（火）〕

生活科室ですでにブロックをしていたDらを見ていたが、加わろうとはせず、担任に出してもらった別のブロックを使って一人で遊び始めた。音楽が鳴ると素早く片付けて教室へ帰った。

ひらがなの練習。担任の指示通りに学習を進めた。後ろの席のDが「この『い』はレベルアップしたんだよ」

という声に振り向いて見た。自分のノートに戻って書き進めた。色塗りでは隣のGと話しながら行う。

体育で遊具遊びを行った。ブランコ、雲梯、鉄棒で遊んだ。同じ場所にいた児童と順番や遊び方について話しながら遊んだ。「代わって」と言われてもなかなか交代しなかったが「早くやらせて!」とせかされて交代した。

業間休みはBと話したり、生活科室へ一緒に出入りしたり、自由帳を開いて描いてある絵についてしゃべったりした。HやIなど、教室に残っていた児童も関わってきた。担任の声かけで自由帳を片付け、算数の教科書を準備して待っていた。

音楽。貨物列車の音楽に合わせて歩くが、担任の後ろを付いて行った。音楽が終わったら、近くにいたEに声をかけてじゃんけんをした。2回目、Cの動きを目で追いながら、近くを歩き、じゃんけんをした。負けて後ろにつながり、先頭児童がじゃんけんする様子を見ていた。すれ違う友達と顔を見合わせて笑うなど、楽しんでいる様子が見られた。

〔平成30年5月8日（火）〕

朝の支度を終えた後、友達の名札を付ける手伝いをしたり、何人かで集まってしゃべったり手をつないで教室内を移動したり、お道具箱の中を見せ合ったりした。一度自分の席に戻るが、話ができる相手を探しているのか、机の間を歩き回っていた。2、3人で話している友達のそばによって黙って見ているが、仲間には入れず移動し歩き回った。予鈴で自席へ戻った。

運動会で使う花笠のひもをはずす作業を指示された。周りの様子を見ながら自力ではずした。隣席のJができないのを見て「貸して」と手伝った。Cもはずせないのを見て手伝った。はずし終わっていない児童を見つけて手伝いに行った。自分から友達に関わる意志をもって行動する様子が見られた。手伝う相手がいなくなると自席に戻った。

2年生に教えてもらいながら朝顔の種まきをした。自己紹介に笑顔は見せるが、いつもより静かな感じであった。緊張しているのか自分からといういつもの感じは見られず、2年生に声をかけてもらってからやってみる、といった様子であった。

(2) 児童Aを中心とした児童の様子の変化について

教室では、自席に座っている時間が長く行動範囲が自ずと限られるので、席の近い児童との関わりが多く見られた。生活科室（プレイルーム）では、他の児童の動きや遊びの様子を見てから自分のいる場所を選び、遊びの途中でも気になることがあれば立って様子を見に行ったり移動したりしたので、動線は複雑になり関わる相手の数も多くなった。体育での遊具遊びや生活科で活動をする時にも同様に、つぶやきや関わりが増加が見られた。また関わり方についても、1人で遊びながら時々近くの児童と関わったり、独り言が会話のようにつながりを見せたりする程度だったが、徐々にしっかりと会話するよ

うになった。友達が何かをやっている様子を見て、自分もやってみようとするなど、困っている友達に寄り添ったり手伝ったりするなど、友達との関わり方に変化が見られた。従来の固定した座席での活動では、関わる友達も限定されがちで豊かな交流を保障することが難しいが、「ゆったりタイム」等のような自由に動ける時間や空間、機会を保障することで、子どもが本来持っている友達と関わる力を存分に発揮させ、新しい環境の中でも十分にやっていけるという自信を持たせることができたと考える。

4. スタートカリキュラム実施後の学級担任からの聞き取り

スタートカリキュラムを実施した1学年担任への聞き取りを中心に、成果の検証を行った。聞き取り調査は、1学期終了時であった。

(1) 幼児期での育ちを発揮できる場（プレイルーム）の設定について

教室と別の空間に遊びの部屋（プレイルーム）を設けたことで、教室と遊びの部屋との間に機能や役割の違いが生まれた。教室が、「学校」として存在したのに対し、遊びの部屋は児童にとって自由に活動できる場であり、安心できる場所になっていた。また、「学校」に疲れた時の息抜きの場として、「学校」で頑張った時のご褒美の場として機能することもあった。

教室では、学習規律を確保し目標に達するための教育を行う際に、共感や賞賛だけでなく指導や注意をする場面が多い。また、児童の言動や学習に対し評価を行うため、できた、できなかったの優劣が生まれる。しかし、遊びの中ではどの子も平等であり、自己を発揮するという点において優劣は生まれない。教室では「できない」ことがある児童だったとしても、遊びの中で生き生きと活動できる子として別の面が見えることがあった。

教室と遊びの部屋を別室にしたことで、二つの部屋の役割が明確になり、それぞれの部屋での機能を生かすことができた。遊びの部屋では、児童の自然な人間関係や幼児期の経験を発揮させたり、教員がそれを見取ったりすることができ、教室では学習に集中することができる。また、登校後、すぐには教室に入りにくい児童が、しばらく一人で過ごし心を落ち着ける場としても機能した。

課題は、同じ時間に2つの空間に児童が分散するため、担任一人では児童全員の安全確保が難しいことであった。本スタートカリキュラムでは、低学年に配置されたスクールアシスタントの勤務時間を1年生の活動時間に合わせてもらい、流動的に人員配置を行うことで問題を解決した。

(2) 遊びの場の活用について

児童がその場にあるものを、自分の興味や関心に応じて道具を選んで遊んでいる様子を見てみると、環境の準備の仕方によっては、小学校で必要な生活や学習のスキルを遊びながら学ぶ時間として活用することもできると

考えられる。例えば、はさみや鉛筆の使い方などは、入学時にどの程度できるかによって、その後の学習にも影響の出るスキルである。しかし、入学時にはそのスキルに個人差があり、一斉指導では必要な児童に十分な時間を確保することが難しいことが多い。はさみを使って形を切り抜く遊びや、のりを使って貼り合わせて模様を作ったり、絵や文字のなぞり書きや写し書きをしたりするなどの遊びを用意しておくことで、基本的な作業や動きを児童は楽しみながら学び、教員は意図的に遊びの中に学習を仕込んでいけると考えた。また、遊びの中では一斉に指導する必要がなく、個々の状況に合わせて声をかけることができるのも、遊びの場の自由度の高さを生かすことができる。

(3) 学校での生活の場の拡大について

「学校探検」は、1学年生生活科の4月の活動内容として位置付けられている。本研究では、児童の興味関心や意識の流れを生かすために、「なかよしタイム」の先生紹介（自己紹介）から先生を探すツアー、校内の施設を探索する活動へとつながるよう計画した。紹介する先生は、比較的1年生に関わりをもつことが多くなる管理職、養護教諭、用務員、栄養士、調理員、音楽専科、6学年担任（兄弟学級として関わるが多い）に依頼した。

入学後2週目から、毎朝1人ずつ新しい先生を紹介したため、児童は「新しい先生が来た」「この先生は普段どこにいるのだろう」「先生がいる部屋を見に行ってみよう」という意識を自然にもち、見通しをもって活動することができた。また、探検した部屋と出会った先生の顔写真を校内マップに書き込んでいくことで、徐々に1年生の活動場所が広がっていく様子が視覚的にも提示できた。

さらに活動を充実させるために、まだ会ったことのない先生を探したり、何をしているか自分でインタビューして調べたりすることで、グループ活動を活性化させたり、他教科（国語のインタビュー単元など）へ結びつけたりして発展させることも考えられる。

(4) 小学校生活へ適応していく児童の変容について

4月からの約4ヶ月間で児童が変わっていく様子が観察された。

まず、プレイルームへの認識の変化である。入学当初、教室では緊張が見られ、プレイルームでの活動を希望する場面が多く見られた。教室での授業中であっても、遊びたい欲求からふらりとプレイルームへ抜けだす児童もいた。しかし、5月の連休を過ぎた頃からそうした姿が減り、6月になるとプレイルームに対する「遊びの部屋」という認識が、「生活科室」（学習する部屋）という認識に変わっていった。

また、遊びの内容にも変化が見られた。入学当初は、ブロックや折り紙、輪投げなどプレイルームにあらかじめ用意されたおもちゃで遊ぶことが多かった。自分が楽

しめるものを自分のために遊んでいる、といった様子であった。しかし、1学期終盤になると、同じように4月から用意してあった廃材（牛乳パックや空き箱など）を使って何かを作ることを楽しみ始めた。また、自分のためだけでなく、〇〇さんのために作る、というような相手意識や目的意識をもつようになった。

（5）幼小連携（育ちの見取り）について

児童が入学してから約4ヶ月間で、成長し著しく変化していく様子が見られた。この成長の基盤に、幼児期のどのような成長の過程があったのか知りたいと思ったが、指導要録や入学前の聞き取り調査の情報からは、児童一人ひとりの成長の様子を読み取ることが難しかった。入学前に、子どもが園でどのように過ごしてきたか、結果でなく成長の過程として知ることが、入学後の指導をするにあたって必要であると感じた。具体的には、保幼小交流会（園児を招いた遊び集会など）の打ち合わせ時に、教員同士の打ち合わせだけでなく、園児の日常の活動を観察するなど、実際の園児の姿を見て話し合う場をもつことが考えられる。

入学時に、他の児童との比較の中で「できる・できない」を判断して始まるスタートではなく、その児童の個の成長の積み重ねの上に、必要な指導を計画していくことが、一人ひとりの力を伸ばすためには大切である。

（6）学級担任の意識について

本研究のスタートカリキュラムの実施前と実施後において、学級担任の意識に違いはあったかどうか尋ねた。

1年生を初めて担任した時、小学校生活スタートの指導を担う者として、1年生のはじめにきちんと躰をしておかなければというプレッシャーを感じていた。しかし、「遊びの時間」の設定の中では、担任も教えなければという意識から解放されリラックスして児童と向き合うことができ、遊びの中での児童の姿を肯定的に受け止めることができた。児童が自由に遊んでいる間、エプロンを着け受容的に関わり、授業中はエプロンをはずして指導をするなど、担任の在り方も環境として重要な役割を果たしたが、担任自身も気持ちの切り替えをすることができた。

エプロンを着けた担任が、絵本を持って「おいでー」と声をかけると、バラバラに遊んでいた児童が自然に集まり、思ったよりも集団行動ができると驚いた。これは、幼児期においてすでにできていたことであり、やり方や声のかけ方等ほんの少しの工夫で、説明や注意がなくてもできることがあることを示している。そういった、園でやってきたことやできていたことを生かすことが、本来もっている力を発揮させ、環境が変わっても安心して生活できるといった円滑な接続につながるということを担任が自覚し、意識して取り入れていくことが今後のスタートカリキュラムでは大切であると考えられる。

本研究では、現在のスタートカリキュラムの課題を明らかにし、教育課程の編成に関して、合科的観点、形成的観点、また、適応という観点からカリキュラム開発を行った。

現在のスタートカリキュラムは、設定期間が2週間程度と短いこと、適応指導や教科指導などでは教師の主導で学習する時間が多く、幼児期での育ちを主体的に発揮する場や、幼児期の学び方や生活リズムに配慮した時間設定が少ないことが課題としてあげられた。そこで、遊びを取り入れた活動を通して幼児期の育ちを発揮する機会を設定すること、園での生活リズムを考慮して、合科的で弾力的な時間の運用を行うこと、育ちを見取り児童の実態に即してカリキュラムの修正を随時行うことを念頭に置いて、スタートカリキュラムの改善案を作成して実践を行った。

実践においては、児童の遊びのスタイルや意識の変容、小学校の生活スタイルを自然に獲得していく様子が観察された。また、従来のスタートカリキュラムでは難しかったと思われる、自分らしさや現在もっている資質や能力を発揮し、優劣の差なく主体的に活動する様子を、遊びを中心とした活動の中で見取ることができた。それにより、学級担任も児童をより肯定的に理解することができたと感じるなど、児童理解の深まりを確かめることができた。

1. 適応指導について

トイレはどこにあるのか、たくさんある荷物やランドセルをどこにしまうか、自分の居場所はどこで、休み時間とは何なのか、知らなければ生活できないことはたくさんある。しかし、幼児期から児童期への移行段階にある子どもの特性として、話を聞いて知識として情報を得たり頭で理解したりすることが、安心して生活できることに直結するというわけではない。新しい環境に適応するとは、自分のよさを安心して発揮でき、自分の居場所としてしっかり認識できることであると考えられる。

入学当初の指導では、特に、話を聞くだけでなく、実際に見に行ったりやってみたりしながら体験的に学ぶよう工夫されている。だが、教師の主導で学習することが多い。子どもは、小学校は「勉強」をするところだという認識もっている。教科書を広げて学ぶ姿に憧れももっている。しかし、整えられた環境の中で主体的な活動を確保されてきた子どもにとって、学習内容やそのやり方が決まっている時間ばかりでは、自分らしさを発揮しにくい。ほんの数日前まで、遊びの中で自分の目当てをもち、自分なりの学びを広げてきた子どもである。教科書を通した一斉指導の中では、分かっているもできない、やりたくても体がついて行かない、という問題に直面する。また、ほんの数日前まで認められてきた「自分らしさを発揮した活動」が、「遊び」として休み時間のような短い時間に封じ込められ、あるいは「勉強」と対立するものとして扱われるとなると、子どもの戸惑いは

V. 研究のまとめ

非常に大きなものであると思われる。

適応指導とは、新しい環境にいかにか子どもを馴染ませるのではなく、子どもが求めるものをしっかり保障するとともに、これからの学習がこれまでの育ちの上に連続してつながっていくものであると子ども自身が確信できるよう環境を整えていくことであると考え。

2. 遊びの場を確保することについて

小学校での「遊び」は、休み時間での息抜きや余暇であると捉えられている。しかし、幼児教育での「遊び」は、その中に学びや育ちや生活の全てが詰め込まれた、重要な位置を占める活動である。小学校に入学してきたばかりの子どもに、遊びを通した学びの場を保障することは意味がある。幼児教育を終えたばかりの子どもにとって、遊びの場とは、自分らしさを発揮する場であり、自分で目当てをもって行動する場であり、自分なりの活動を認められる場であり、今まで育ってきたものを発揮できる場である。今の自分を存分に発揮し、認められることで安心感を得、また新たな活動に挑戦する、といったサイクルが自立への道筋を作っていく。

遊んでばかりでは学習ができないということはない。しっかり遊んで満足すれば、自然と遊びから離れていく。充分満足すれば、子どもは自然と次の活動へと移行していくのである。もちろん、揺り戻しも見られる。長期休業明けや、心身が不安定になると、逆行する様子も見られた。しかし、しばらく遊んで落ち着いてくると、また1年生の勉強に戻っていった。行きつ戻りつしながら徐々に成長する子どもを、ゆったりとした長い目で支援していかなければならない。

3. 保幼小の円滑な接続のために

幼小連携について、小学校のスタート時に児童の足並みをできるだけ均一にそろえられるよう小学校からの要望を伝える、あるいは幼児期における問題行動を早めに情報交換するという捉え方は改善する必要がある。小学校教員にとって、幼児教育のねらいや教育内容、教育方法について深く追求する時間や経験は少ない。今まで毎日遊んで過ごしていた子ども達が、突然学校教育の場に入るわけだから、初歩から丁寧に教え込まなければならないという意識が強くなりがちである。しかし、子どもはゼロの状態では入学してくるのではない。幼児教育の場で遊びを通して考え、選び、試行錯誤しながら、集団生活を送ってきているのである。スタートカリキュラムでは、この入学までに育っているものを発揮させることに重点を置きたい。子ども一人一人ができるようになっていくことを認め、新しい環境の中でも自信をもってやっていけるという実感をもたせることが、その後の小学校生活を充実したものにするために大切であると考え。

VI. 今後の課題

幼児教育で育ってきた子どもがスムーズに小学校生活に移行し力を発揮できるよう、スタートカリキュラムは

存在している。そのためには、子どもの育ちを大切にすることが重要であり、幼児教育で育ってきたものをどうやって発揮させて見取ることができるか、そしてそれをどう小学校教育につなげていくか、それを考える必要がある。幼児期に育ってきたものを見取り、受け止め、そしてつないでいくためには、小学校教員の視点が、もっと幼児期の育ちに寄り添っていかなければならない。すなわち、子ども観や学びに対する考え方など、小学校教員の意識を改革し広げる必要があると考え。

これからのスタートカリキュラムは、子どもがこれまでの育ちの中で獲得してきた資質や能力を十分発揮させ、自己肯定感や満足感をもって活動することを通して、それを更によりよい方向へ伸ばしていくことについて重点的に考える必要がある。今後は保幼小の連携だけでなく、低学年から中学年への円滑な接続に向けて、カリキュラム・マネジメントの観点から開発を行っていきたい。

引用・参考文献等

- ・新保真紀子 (2001) 『「小1プロブレム」に挑戦する一子どもたちにラブレターを書こうー』 明治図書
- ・さいたま市教育委員会 (2010) 「さいたま市小学校教育課程指導資料」
- ・木村吉彦 (2011) 幼児教育と小学校教育をつなぐ生活科の教科特性とスタートカリキュラム『教育創造』vol.169、上越教育大学内附属小学校内高田教育研究会
- ・埼玉県教育委員会 (2013) 「学びの土台ハンドブック～初めて低学年を指導する教師のために～」
- ・文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター (2015) 『スタートカリキュラムスタートブック』
- ・片平みちる、野田敦敬 (2016) 生活科を中核としたスタートカリキュラムの実践分析からの一考察―「子どもが安心感をもって生活することを目指す」名古屋市Z小学校の実践より―『愛知教育大研究報告(教育科学編)』65、pp.9～16
- ・三浦光哉 (2017) 『5歳アプローチカリキュラムと小1スタートカリキュラム～小1プロブレムを予防する保幼小の接続カリキュラム～』 ジアース教育新社
- ・加納誠司 (2017) 幼小の連携・接続における生活科の果たす役割と可能性『教職キャリアセンター紀要』vol.2、pp.9～16
- ・こども青少年局、横浜市立本郷台小学校 (2017) 平成29年度学びの芽生えと自覚的な学びをつなぐ～子どもの思いに寄り添ったカリキュラムマネジメントによる授業の質的向上～スタートカリキュラム公開授業・研究会(幼・保・小接続期研修) 配付資料
- ・朝井宜人 (2017) 保・幼・小をつなぐ、みんなが安心のスタートカリキュラム～子どもに無理がない、教師にも無理がない、大手町小の「安心スタートプラン」～、日本生活科・総合的学習教育学会第26回全国大会東京2017 配付資料

4月 第2週 テーマ「がっこうだいすき！～ともだちだいすき～せんせいだいすき」

月・日(曜)	4月16日(月)		4月17日(火)		4月18日(水)		4月19日(木)		4月20日(金)		
学校行事等					給食開始		ようこそ集会				
始業前 (登校~8:15)	・荷物の片付け ・名札付け ・ゆったりタイム		・荷物の片付け ・名札付け ・ゆったりタイム		・荷物の片付け ・名札付け ・ゆったりタイム		・荷物の片付け ・名札付け ・ゆったりタイム		・荷物の片付け ・名札付け ・ゆったりタイム		
業前活動	↓		↓		運動タイム (校庭で見学)		↓		ようこそ集会 (体育館)		
朝の会	なかよしタイム (歌遊び、○先生紹介)		なかよしタイム (歌遊び、△先生紹介)		なかよしタイム (歌遊び、■先生紹介)		なかよしタイム (歌遊び、●先生紹介)		なかよしタイム (歌遊び、◇先生紹介)		
第1校時	8:50	国語	読み聞かせ 健康観察	国語	読み聞かせ 健康観察	国語	読み聞かせ 健康観察	国語	読み聞かせ 健康観察	国語	読み聞かせ 健康観察
	9:05	生活	「学校を探検しよう」 ○先生はどこにいる？	生活	「学校を探検しよう」 △先生はどこにいる？	生活	「学校を探検しよう」 ■先生はどこにいる？	生活	「学校を探検しよう」 ●先生はどこにいる？	生活	「学校を探検しよう」 ◇先生はどこにいる？
	9:20										
	9:35										
第2校時	9:40	道徳	たのしいがっこう ・学校でどんな人がいたか ・どんなことをしていたか (挿絵を見て)	国語	なかよし	体育	体ほぐし 遊具遊び	国語	あかるいあいさつ	道徳	あかるいあいさつ
	9:55		・どんなことを話しているだろうか								
	10:10				ひらがな				ひらがな		
	10:25		・楽しい学校生活のために気をつけることはなんだろう。								
業間	10:25	外遊び (担任は教室で待ち、音楽で帰ってこられたことをほめる)		外遊び		外遊び		外遊び		外遊び	
	10:40										
第3校時	10:45	国語	なかよし	算数	なかまづくり とかず	国語	なかよし	音楽	うたにあわせて うたっておどろう	国語	あかるいあいさつ
	11:00										
	11:15	学活	帰りの支度 並んで校庭へ	学活	帰りの支度 並んで校庭へ		ひらがな				ひらがな
第4校時	11:35	正門近くでコース色別に並ぶ。 保護者の迎えがきているか確認 下校指導(並んで歩く、安全確認) 帰りのあいさつ 保護者に引き渡す				学活	給食がはじまるよ ・準備の仕方 ・当番の仕事 ・配膳の仕方	算数	なかまづくり とかず	算数	なかまづくり とかず
	11:50										
	12:05						給食の準備 (教員が配膳)		給食の準備 (教員が配膳)		給食の準備 (給食当番が配膳)
給食					給食		給食 片付け・歯磨き		給食 片付け・歯磨き		
昼休み					給食の片付け、歯磨き		帰りの支度		帰りの支度		
清掃					帰りの支度 並んで校庭へ		そうじ見学 並んで校庭へ		そうじ見学 並んで校庭へ		
下校指導					保護者への引き渡し		保護者への引き渡し		保護者への引き渡し		
下校時刻	11:40		11:40		14:10		14:10		14:10		
持ち物	手提げ袋、上履き				給食セット		給食セット		給食セット		
スタンダードの定着	予鈴が鳴ったら遊びをやめて 教室に戻る				運動タイムの約束 給食配膳時の約束		清掃の仕方		給食配膳時の約束 給食当番の仕事		
環境・準備	上履き袋回収箱 道徳の教科書				配膳台等				給食当番のグループ表 給食当番のエプロン		
安全指導	安全な下校について再度指導 を行う				食事前の清潔、食後の 歯磨き		そうじ見学の場所確認		配膳時の道具の扱い方		
見取りのポイント	週明け、元気に登校しているか 授業中に発言しようとしているか		友達と関わっているか		友達と関わって遊んでいるか		音楽を楽しんでいるか		当番の仕事ができるか		
協力体制	自己紹介(○先)		<p>第2週目のねらい(○児童 ★担任)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分の力を発揮できる場を見つけて、安心して活動できるようになる。 ○学校探検をしながら、新しい場所や人間関係、学校でのきまりに慣れる。 ○楽しい、と感じる活動を通して、意欲的に学校生活を送ろうとする態度を身に付ける。 ★幼児期で育ってきたであろう力を、一人一人見取り、次の活動や学習に生かす。 ★遊びの延長として教科の授業を展開する。(導入の工夫、活動を多くする、視覚的な提示) 								
保護者への連絡											
その他											